



1. 達磨大師像 絹本着色
室町時代 15-16世紀 縦103.0cm
2. 霰釜 江戸時代 18世紀、火鉢 朝鮮時代 19世紀、鉄
絵花菱文陶板 美濃 江戸時代 17世紀
3. 刷毛目茶碗 朝鮮時代 15世紀後半-16世紀前半 径17.0cm

1	3	5
4	6	
2	7	

4. 狭間 (窯道具) 瀬戸 20世紀 高16.5cm
5. 鉄釉文字入壺 丹波 江戸時代 19世紀 高9.5cm
6. 鉄絵草文壺 唐津 桃山時代 17世紀初期 高9.7cm
7. 第一回民藝館茶会室飾りの一場面
河井寛次郎、濱田庄司らの茶碗、茶入など



開館時間：午前10時～午後5時（入館は16時30分まで）
 休館日：月曜日（ただし祝日の場合は開館し、翌日休館）
 入館料：一般1,000円 大高生500円 中小生200円
 交通：京王井の頭線駒場東大前駅西口から徒歩7分
 所在地：〒153-0041 東京都目黒区駒場4丁目3番33号
 電話番号：03-3467-4527
 西館公開日（旧柳宗悦邸）：
 会期中の第2水曜、第2土曜、第3水曜、第3土曜日（入館16:00迄）

<http://www.mingeikan.or.jp/>

日本民藝館



大井戸茶碗 銘「山伏」 朝鮮時代 16世紀 径16.1cm

茶と美

— 柳宗悦の茶 —

2014年1月10日(金) - 3月23日(日) **日本民藝館**



餉盆 江戸時代 19世紀 高24.0cm



赤土部釉灰被壺 丹波 江戸時代 17世紀 高15.8cm



鉛釉水注 英国 デヴォンシャー窯 20世紀初期 高29.5cm

当館創設者柳宗悦(1889-1961)は「茶」とその「美」について、生涯に渡り強い関心を寄せました。自らは茶の道に入ることはありませんでしたが、在野の立場から茶に対する独自の仕事を展開していったのです。

柳が高く評価したのは、初期の茶人達の自由な眼でした。茶器ならざるものから茶器を選んだ鋭い「直観」を尊び、眼の先駆者としても敬ったのです。見たての実例に雑器として生まれた井戸茶碗などをあげ、それらは茶祖の創作だと讃えました。茶祖の業績は、自身が推進する民藝運動の指針となり、提唱する民藝美論にも多くの示唆を与えたのです。

また柳は茶の礼法についても、用い方が型にまで高まったものだという、茶における型の美を尊重しました。個人を超えた型を所作の模様化と評し、ここでも民藝との接点を確かめます。

そして茶と禅との濃い結縁を重視した柳。茶は禅修業の様式であるとして、茶事と禅事との同一性を説き、重ねて井戸を始めとする美しい茶器を禅意の具体的な姿であると述べ、その因縁に喚起を促したのです。

さらに暮らしと茶の交わりにも眼差しを注ぎました。柳は茶事を茶室だけにとどめず、日常に活かすことを奨めます。日々用いる器を茶に適ったもので整え、行住坐臥が茶と結ばれるよう願ったのです。

晩年となった1955年12月、柳は日本民藝館で第一回民藝館茶会を試みました。長年にわたって蒐集した館藏品から、既成の「茶」に囚われずに選んだ茶器と自身考案の道具を用い、半座礼という椅子式でおこないました。柳は茶会について「道具とか室飾りの方は、凡て私が背負った。(中略)私が一番気を配ったのは室の飾りつけであるが、どれだけ気附いてくれた人があるのか」(『民藝』39号)と書いているとおり、使用した茶器と部屋の設えに重きを置いたことが伺えます。

それは「茶が美の世界のことである限りは、美しき器物のみが茶器たるの資格を受ける」(『禅茶録』を読んで)という柳の基本理念にも合致し、「美を修することと、『茶』を修することとは別事ではない」(『茶道を想ふ』)という思想に繋がるものだったのです。その後病に臥し、61年に歿した柳。この茶会は柳の志向した茶の貴重な記録でもあります。

本展はその第一回民藝館茶会と58年に催した新撰茶器特別展などを軸に再構成をはかり、くわえて柳が日常使用した器物も展覧して、「柳宗悦の茶」を紹介するものです。

茶祖が取り上げた茶器の美。柳はそれを「無事むじの美」「只麼しよの美」と呼び、賞讃しました。その美は自身が『美の法門』で説いた「美醜なき美」と確かな重なりを見せます。「美」と「醜」の相対を超えた美しさは、柳が日本民藝館に蒐めた多くの工芸品にも宿り、「美の標準」として提示されました。無上の法門は今も開かれているのです。

- 記念講演会
- I. 岡倉天心の茶と柳宗悦の茶 〔講師〕清水恵美子(茨城大学非常勤講師)
2014年1月25日(土) 18:00-19:30 料金・300円(入館料別) 定員・70名(要予約)
 - II. 民藝運動と茶道 〔講師〕鈴木禎宏(お茶の水女子大学大学院准教授)
2014年3月15日(土) 18:00-19:30 料金・300円(入館料別) 定員・70名(要予約)

展示室 1 階

〔玄関〕漆工芸 — 漆絵と根来を中心に

秀衡碗や浄法寺など、主に朱漆で「漆絵」が施された漆器と、社寺の什器として作られながら、上塗の朱漆が擦れてできる自然な模様が近代の数寄者に喜ばれた「根来」を中心に展示。中世から近世の日本の漆工芸を紹介します。

〔第1室〕丹波の古陶

日本民藝館には、常滑や瀬戸など日本六古窯の品が収蔵されています。中でも、柳宗悦は古丹波の魅力に惹かれ、その蒐集に力を入れていました。今回は柳が愛した自然釉(灰被)の壺や徳利など丹波焼の数々を紹介します。いまだに色褪せることのない古丹波の美しさをご堪能ください。

〔第2室〕日本の諸工芸

展示期間：2月1日～3月24日(1月31日まで閉室)

日本の各地において、身近な材料を素材とする生活に即した美しい工芸品の数々が生み出されてきました。この展示室では、藁や布を用いた蓑や背当て、竹や蔓を用いた籠や笥、桜の皮を用いた樺細工の箱や印籠、芯切鉄や灰ならし等の金工品を紹介します。

〔第3室〕庄内被衣を中心に

庄内被衣かづきは、東北・庄内地方で冠婚葬祭のときに女性が頭から冠った衣装です。多くは麻地に筒描や型染の技法による藍染で、背の大きな菊紋や裾の松、菊、ぜんまいなどののびやかな模様も見所のひとつです。

展示室 2 階

〔大展示室〕茶と美 — 柳宗悦の茶

〔第1室〕朝鮮陶磁の精華

国内屈指の質と量を誇る当館所蔵の朝鮮陶磁器。その中核である17世紀末から19世紀後半の白磁や染付を中心に、朝鮮時代初期の陶器、そして高麗時代の陶磁を加えて、柳が生涯にわたって愛し続けた珠玉の朝鮮陶磁を紹介します。

〔第2室〕棟方志功旧蔵「胸形井戸」と民藝

版画家・棟方志功は、自らも朝鮮茶碗などを用いて日常的に「茶」をたしなんでいました。本展示室では、近年当館に寄贈された棟方志功旧蔵の絵画や朝鮮陶磁を中心に、柳宗悦や河井寛次郎たちとの交流を示す作品を展示します。

〔第3室〕茶と美 — 柳宗悦の茶

柳がおこなった第一回民藝館茶会「別室」の設えと茶器を再構成して展覧します。「別室」では主に朝鮮茶碗や日本の民窯の器などが用いられました。いずれも茶器ではない器から見たてた茶器です。床には禅の開祖達磨大師の像が掛けられました。

〔第4室〕茶と美 — 柳宗悦の茶

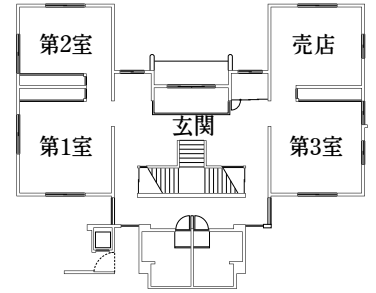
柳は当館所蔵品について、その美の性質を「無事」や「無碍むび」という言葉でも説きました。その意味では館藏品の多くが「茶」に適うと柳は考えていたと思います。ここでは今展で新たに選択した茶器と、柳が著作などで紹介した茶器を併せて展示します。

記念茶話会 棟方志功流お茶の楽しみ

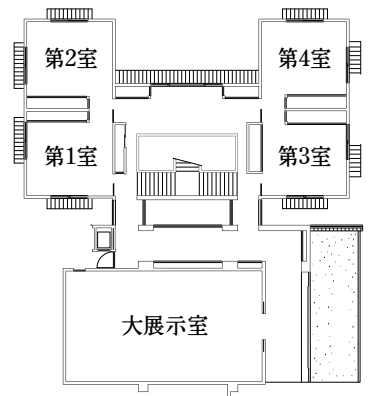
〔講師〕石井頼子(棟方志功研究・学芸員)

3月8日(土)、9日(日) 各2回 11:00-12:30、14:00-15:30、各回12名(要予約)

会場 日本民藝館西館(旧柳宗悦邸) 会費 3,000円(入館料込)



〔1階第3室〕菊大紋春霞文様被衣(部分) 江戸時代 18世紀



〔2階第2室〕鉄砂籠文壺 朝鮮時代 17世紀 高32.8cm 棟方志功旧蔵